

かながわ さとおや

平成 29 年 2 月発行

発行 神奈川県里親会事務局

藤沢市みその台 1-3

聖園子供の家 気付

TEL 090-7630-4131



H. Sくん（中1）

☆もくじ☆

・ 第 61 回全国里親大会茨城大会 ・	
第 62 回関東甲信越静里親研究協議会茨城大会	1 ～ 2
・ 第 29 回神奈川県里親大会	3 ～ 6
・ 養育体験集＜ショートストーリー＞	7 ～ 8
・ 研修報告～ひこばえより～	9
・ 地区だより	10～11
・ 編集後記	11

全国里親大会茨城大会

全国里親大会茨城大会に参加して

会長 本多 洋実

第 61 回全国里親大会茨城大会、ならびに第 62 回関東甲信越静里親研究協議会茨城大会が、茨城県水戸市の県民文化センターにおいて、11 月 12 日（土）・13 日（日）の 2 日間で開かれました。大会テーマ「子どもたちに夢と希望を～里親として出来ることを一緒に考え、共に喜びを分かち合おう～」を掲げ、盛大に開催されました。茨城県里親連合会の実行委員会（八文字喜久夫実行委員長）が予測していた 450 人をはるかに超える 600 人の参加があり、分科会の割り振りに大変苦労するなど、うれしい悲鳴が上がるほどの盛会でした。

大会は「里親信条」の唱和に始まり、新たに全国里親会会長に就任した河内美舟（こうちみふね・山口県里親会会長）氏の就任挨拶がありました。顕彰では私たち神奈川県里親会から乃一俊弘・香代子さんご夫妻が全里会長表彰を、高橋真・聖子さんご夫妻が関東甲信越静里親研究協議会会長表彰を受けられました。おめでとうございます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

厚生労働省家庭福祉課長川鍋慎一氏の行政説明は、「社会的養護の推進に向けて」と題して、家庭的養護推進に関わる現状報告や今後の説明がありました。特に里親支援や特別養子縁組に関する児童相談所の役割が明確にされたことが印象に残りました。

記念講演は元高萩市長の草間吉夫氏による「私が歩んできた道」と題した講演でした。笑いの中にもご自身の施設生活や里子の時期の経験を熱く語っていただきました。「いつも同じ内容ですいません。」とお話しされていましたが、参加者は拍手で応えていました。

7 つの分科会がありましたが、私は分科会の一つとしてしての関東甲信越静里親茨城大会に参加しました。「私はこうしてピンチを乗り越えた」をテーマに、会員が互いの経験を登壇して発表し合い、都県あるいは児童相談所によって対応が異なることや、他の地域の良いところは持ちかえて実行に移すことを話し合いました。

さて、全国里親会は 7 月に内閣府から「勧告」を受けました。それによって全役員が辞任をするという事態になりました。10 月に新体制が決まり、新たな顔ぶれによる評議員会・理事会がスタートしました。

私は全里の新理事に就任し副会長を拝命しました。その直後の全国大会です。突然主催者の側に立つことになりました。神奈川県里親会の会長に就任したばかりにもかかわらず、突然の全里副会長就任でした。今までは一般会員として全国大会等の行事に気楽に参加していたのですが、今回はそうはいきませんでした。大会申し込みしたときは県の会長として申し込みました。ところが 10 月に全国大会主催者側の立場になりました。しかも、全国代表者会議や全体会の司会進行役となりました。

出席された方はご存知の通り、「勧告」に関する質問や疑問、さらに IF00 大阪大会の会計報告についての質問が出され、その対応に難しい対応を迫られました。今後、新体制の責任において調査・報告することを新会長が約束しました。この件について現在調査を進めています。

新しい執行部が公益財団法人全国里親会のかじ取りを進めています。内閣府や厚生労働省と相談しながら進めています。新しい組織として第三者委員会を発足し、外部の専門家の意見を取り入れながらガバナンスの確立やコンプライアンスを尊重していきます。

茨城県の実行委員会の皆さんのお陰で全国大会は無事に終わることができました。感謝です。

さて、今年は 9 月 30 日（土）・10 月 1 日（日）、京都で開催されます。神奈川から大勢参加して研修と親睦を深めましょう。



全国大会・関東甲信越静大会が同時開催となり、第7分科会に「私はこうしてピンチを乗り越えた。」大きくて大変重いテーマが関東甲信越静里親研究協議会茨城大会に提案されました。

このテーマは事前に用意された発表ではなく前日懇親会席上で参加者をお願いし体験発表になりました。

中でも4名の里親さんの生々しい苦労話は里親魂の叫びでした。紙面制約でポイントを纏めました。

*見えるものは何でも口に持って行き一時も目を離せない子。

*有ること無い事道路やスーパーマーケット、家庭でも、ところかまわず奇声、大声で喚き出すので常に寄り添って目を離せない子。

*幼稚園では仲間をいじめたり叩いたり先生も困り果てて退園させられる子。

*子どもの間違い行動を正すと虐待と間違えられ、叱る事、大声にも神経を使う。

*学校からは呼び出しが多く、精神的、肉体的にも疲れ家庭崩壊。

*思春期はトラブルが複雑。会話が成立せず暴力的になり、金銭問題にも悩む。

*特に里母さんは疲労困憊で体調を崩す。この様な時は里親仲間に話すことで救われ、また里父・家族の協力で耐えられた。

*ヘネシー先生の講演と相談で、愛着障害が関わっていること、発達障害、ネグレクト等生い立ち、環境に振り回される子どもが多くなって来ている現実を勉強した。

20年位前まで悩み事は万引き・盗み・夜尿等が中心でした。最近は奇異な行動をする子どもがどこの地域でも多くなりました。困難な子ども委託が増え里親は振り回されながら皆必死に頑張っております。



「子どもきかく」にさんかしました。

M美(小学4年)

1日目は水族館(大洗水族館)へ行きました。イルカとアザラシのショーを見ました。イルカショーで前にすわっている人がびしょぬれになったので離れたところから見ていましたが、少しぬれてしまいました。大きいイルカと小さいイルカがいて、大きいイルカが自こしょうかいで飛びはねてびっくりしました。小さいイルカの自こしょうかいでは手をふったのでかわいいなあとと思いました。次に、アザラシが鼻にボールを3個乗せてバランスを取っていたところがとてもかしこいなあとと思いました。

2日目は納豆工場へ行きました。1日目の水族館の帰りに、納豆のきれいな子が「あしたの納豆工場は納豆のにおいがくさそうでいやだなー」と話していましたが、納豆工場の見学がダメになって、納豆工場の納豆が売っていたりする博物館に行ったのでにおいはありませんでした。博物館で、とうふのし食やいろいろな納豆の種類のし食をしてとてもうれしかったです。特に気に入ったのは小さな大豆の納豆で、すごくおいしかったです。納豆の作り方をビデオで見せてもらって、おみやげに納豆ふりかけをもらいました。

バスは2台に分かれて乗りました。バスにスピーカーがあって、いろんな子がおもしろいことを言って大笑いしました。特におもしろかったのが高校生のお兄さんで、へんな歌を歌ったので笑いをこらえていましたが、おもしろすぎてふき出してしまいました。小学2年生の子が自分の好きな歌をきれいな声でひろうしていて私もそれをまねしたいと思いました。でも、はずかしいので私はスピーカーに向かって歌いませんでした。私は友だちとおしゃべりをしていました。おやつもいっぱいもらってとても楽しい2日間でした。

第29回神奈川県里親大会 報告

実行委員長 中村 寛志

第29回神奈川県里親大会は、好評のうちに終了することが出来た。

主催者挨拶と共催者の神奈川県、二宮町を代表する方々からの励まし、里親制度に関心を持つ衆議院議員の河野太郎氏にも、ご挨拶をいただいた。

講師の山本恒雄氏から、『家庭による養育から、社会による養育まで。社会的養護の真ん中で里親養育を考える。』との主題で講演いただいた。

見守られていないという不安の中で過す子どもたちは、イライラと、憤懣を積み上げて行き、その重荷は、何時か爆発したり子どもの健康であるべき生活を害していく。

極端な場合には、命をも短くさせ、早すぎる死に至ることもあると聞き、こころのダメージは、早く修復すること、特に人間関係で受けたダメージは、人間関係の中で癒し、修復することが重要であることを教えられた。

また、思春期に回復すべき親子関係は、実親でも里親でも良いこと、年齢の段階、男女の違いによる影響なども、落ち着きと静けさの中に生活が出来ているという実感を青春時代までに気づき味わっておくという経験が必要だとのことだった。

これに関連する新しい試みとして、児童養護施設のこれからのあり方に、里親が養護施設のケアスタッフとして関わることが提唱された。私達の役目の広がり、担い手としての重要性が改めて認識された。

『あなたをずっと見守っているよ！』という呼びかけに気づいて、自分を取り戻す子どもが増えることを願い、閉会挨拶で大会を終了した。

肩車の子どもと青い空のイメージ、主題の「見守り」に、協賛の会社から多くの実働的な援助をいただき感謝である。



第 29 回神奈川県里親大会 基調講演 要旨

『家庭による養育から社会による養育まで。社会的擁護の真ん中で里親養育を考える。』

講師 山本恒雄氏

社会的擁護 代替養育サービスを受けている子どもの約 6 割に被虐待経験がある。

多くの子どもが、それまでの生活経験を通じて周囲に対する不満や恨み、怒りを発散、解消できずに抱えたまま生きている。封印された感情は子どもの日常生活上の意識からも排除され、表面的には何もなかったかのような良い適応状態、過剰適応が生じることもある。

封印された怒りや恨みは、養育者と過ごした環境と同程度の親密性や対人関係の場、よく似た出来事などが引き金になって急激に表面化する。里親委託後の初期段階に、しばしば子どもが激しい感情や暴力的な攻撃性を示すことがあるが(いわゆる「ためし行動」)、子ども自身もコントロールできない、ガス抜き反応として理解する必要がある場合も多い。

最も長く、かつ妨害的にはたらくのは「おびえ」「無力感」に基づく愛着反応で虐待経験によることが多い。

暴力被害・不適切養育と愛着

どのような不適切養育にある親子でも、その親が主たる養育者である限り、子どもはその親との間で「愛着関係」を形成する。→ 隷属的 or 混乱した「愛着関係」

不適切養育における愛着の形成

自分にとって脅威であり、危険な人物を最も頼りとしなければならない関係の場合、相手の価値観を絶対のルールとして自分をそれに合わせようと努力する。

無力感・絶望が強くなる→学習性無力感 適応努力が強くなる→ストックホルム症候群

養育が支離滅裂→無統制型愛着 侵害的な事実を当たり前のことと思いこもうとする、その思い込みからはじきだされると直面化→症状化

この洗脳学習から離脱させること。直面化による混乱・症状化が回復の一步となる。

逆境的小児期体験(AEC)

人生早期の逆境体験が将来の疾病、トラブル、早すぎる死を予告している。(Death Pyramid)

人生の早期から子どもが安全・安心を脅かされることからできるだけ早く発見して守り、受けてきたダメージを修復して、健全な成長、自立した大人への道筋へとつなぐ支援を提供する。→ 人間関係で生じてきたダメージは人間関係で修復する必要がある。

パーマネンシー 養育における永続性が子どもにもたらすこと

子どもの成長・発達にずっと変わらずに寄り添い、子どもの成長を喜び、愛着・愛情の絆をずっと支えてきた人、永続的に寄り添う人がいる。→パーマネンシーの保障

施設養育と家庭養護の推進の課題

児童養護施設の小規模化、家庭的養護の推進が進められる中、子ども一人に対する養育者の数が少ない家庭養護に、常時複数対応が必要な子どもは対象としにくい(施設養育が適する子どもも多い)。→個別の愛着形成のための体制整備が必要→個別ケアスタッフとしての里親の施設スタッフ参加により、パーマネンシーの保障を目指す。



あなたをずっと見守っているよ。

今大会のテーマの言葉です。とても暖かい言葉だと思いました。里子を迎えた時に、養育の難しさを感じた里親は数多くいらっしゃると思います。

この難しさはどこから来るのだろう、悩まれる方も多いことと思います。

この講演で、山本先生は、一貫して一定の養育者と暮らすことがいかに大切か、ということをお話ししてくださいました。

施設や里親家庭で育つ子ども達は、幾度となく過去と分断されてきています。繋がらない過去、ルーツが分からない、過去を共有できる人がいない、ということは人間形成にとっても影響を及ぼすそうです。

一定の養育者との継続的な関係を築くには養子縁組が最も望ましいが、現実には実親の許可もいることもありなかなか難しい、できることからしていくしかない、と山本先生はおっしゃいました。

できることとは、親の同意が得られない子どもと長期の継続した関係を築くには、里親側から積極的に施設と関わっていくということでした。

今までは、養育の先行経験者である施設が里親支援をおこなうことが重視されていましたが、里親の施設養護への積極的な関わりにより、特定の大人と子どもが長期にわたり継続的に関わっていく事も重視されているのではないかと、そのことが今現状で私達にできることではないかと先生は投げかけてくださいました。

幸いなことに、神奈川県は児相、施設、里親の間に垣根を感じる事が無く、子ども達の幸せのため、という同じ方向性で繋がっていると思います。

子ども達を幸せにする答えはまだみつかっていない、できることからしていくしかない、この山本先生のお言葉は、社会的養護に関わるものすべての背中を押してくださるものと、心に残りました。

子ども達がいつも見守られていると心を満たすことができるように、そして子ども達の幸せと明るい未来のために、道が開かれていく事を心から願っています。



この日本という国自体が里親や特別養子縁組等をはじめとした制度を推進しようとしているのは以前から知ってはいたが、子どもを取り巻く家庭・学校他の環境から事件・事故が多発している理由からであって、「血族」重視にしてきた日本という国がようやく重い腰を上げざるを得ないというのは時代の流れや経過から仕方のないことであるが、「出来る人間が出来る範囲でやってみる」事は非常に大事であると考えている。

海外は里親・里子という制度が昔から日常生活の中にあり、他人にも会話の中に普通に家族関係を伝えられている状況ではあるが、日本と全く違う文化であることは当然仕方のないことで、「人」を大切にしていることは見習う必要がある。

よって、今という現実がここにある以上、過去からの文化や慣習にしがみつくと必要性はないと考える。

当然、日本という国の安全・平和は確保しつつ、皆が平和に楽しく、ではないが、少なくとも「今現在、困っている、辛い思いをしている子ども達」を救うためにも助けようと行動している我々に理解してくれる人が増えてほしい。

「里親がこれだけいても子どもを預けられないならば」という点で里親と施設との共同サポートを提案することは「出来る人間が出来る範囲でやってみる」に値すると考える。

最後に、年1回の県でのイベントならば、もっと多くの人が参加する事、一般の方々にこのイベントをアピールして聞いていただくべき、と感じた。

小学1年生の娘が学校から帰ると玄関先で抱っこを求めます。時には我が家にやってきた頃の2歳の自分になったと言って甘えます。学校で頑張ってきた自分を癒やして欲しい、そんな要望の毎日です。頑張って、癒やされて、また頑張る。その繰り返しで、初めての学校生活でたくさんの経験を積んで日々成長しています。

そんな癒しの提供と、子どもと永久的な繋がりを持つ為に養護施設に里親が行って関わって行くというお話を聞いて、正直それは難しいなと思いました。私も含め多くの里親は自分の子として生活を共にするのを希望していると思うからです。でも、「難しくても、何か出来るところから少しずつ手を出して行かなければ何も変わらない」という言葉を聞いて、確かに今は出来なくても、数年後、娘に手がかからなくなって、でももう一人を自宅でみて育て上げるのが難しいと感じる時がきたら、そういう関わり方も可能になるな、と思いました。里親の新しいあり方だとも思います。講演を聞いていて娘の卒園した幼稚園長が繰り返していた言葉を思い出しました。「子どもが成長するには20人の大人に見守られることが必要だ」たくさんの大人に愛され、癒され、励まされ、見守られ、正されて育つのだと。私も出来る時期がきたら、誰かの20人のうちの1人になって支援したいと思います。



城山学園 里親支援専門相談員 鈴木裕美子

当日、託児を担当しました。子ども31名（1～4歳16名、5～11歳15名）を32名（学生ボランティア16名含む）のスタッフでお預かりしました。大きい子どもたちは元気に吾妻山頂上を目指す予定でしたが、天候不良のためすべての子どもが室内リクリエーションとなりました。

輪くぐり、ボール運び、じゃんけん列車、魚釣りなどの体を使った遊びと、ファンルーム、動物ヨーヨー、びっくり箱など各コーナーに分かれて製作遊びをしました。

とりわけ魚釣りゲームはおいしい魚（おやつ入りの袋）をなかなか釣り上げることができない子もいてみんなひやひやしましたが、そこは頼もしい先輩漁師さんがペアなので大丈夫！ それからびっくり箱の製作は大好評でした。「わあ～!!」「きゃー!!」とまさにびっくり嬉しい歓声があちらこちらで聞こえました。

小さい子どもたちは、ブロックやままごとなどでゆっくりのんびり過ごしました。が、参加できる子はレクリエーションに参加し楽しみました。小さい子の相手をしてくれる大きい子もいて、とてもほほえましい光景に感激しました。

子ども1人が発熱してしまいましたが、看護師の早い手当で大事にならずにすみました。一緒にゲームに参加できず残念でしたがまた一緒にやりましょうね。

子どもたちと一緒に楽しんでもうたくさんのボランティアの皆様ありがとうございました。「子どもたちの幸せ」を願い、一緒に子どもたちを見守っていきましょう！



実行委員一同と作業風景

おつかれさまでした



養育体験集<ショートストーリー>



幼稚園で初めての参観日。お弁当の時間になり皆が帰った後「ママに会いたくなっちゃった」と泣いてしまったそう。担任の先生には最初の面接で事情を話していたので、うまく対応してもらえました。

通りすがりの人に「かわいいわね。ママ(里母)にそっくり」と声をかけられると、善意で言ってくださっているだけに返答に困ってしまいます。

実子が友だちに里子の説明をするのが難しいようです。さしさわりのない時には妹と言っているようですが、小学生に分かりやすい説明が知りたいです。

保育園の園たよりで、誕生月に「名前の由来について」の質問がありました。8月生まれのため、早くから乳児院や児童相談所の方に連絡をしました。母子手帳はあるものの、結局誰が名前をつけたのか、由来は何かわからず、私たちで本人への希望を込めて由来を決めました。

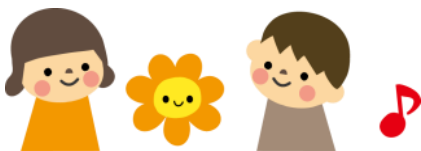
我が家には長期で2歳の男の子がいますが、施設で2年間生活していたため、公園などで人の三輪車に勝手に乗ったり、人のボールを欲しがって泣いたりと恥ずかしい思いをしています。施設では何でも自由に使えたので、お友だちの家へ行っても、自分の物の様におもちゃで遊んでしまうので、お友だちが泣いてしまったこともありました。スーパーに行けば何でも「開けて!開けて!!食べる!食べる!!」と泣いて。本人には話しても理解してもらえないのが、つらいです。

遊び食べの癖があった里子。毎食のことで注意する私たちも辛かったです。駄目なものは駄目と揺るがない態度で接していることで、いけないことと理解をしてくれました。

年長から三日里親できていた子が、小学校に入ってもおねしょを毎回します。心配して、再三施設に病院受診をお願いして、小3から近所の小児科で漢方薬を処方されていたのに効かず、中学生になって病院を変えたところ、すぐに治りました。

緊急で2週間預かった年長児。とてもかわいくて、帰す前に私の方が落ち込んでしまい、子どもに「また遊びにくるから」となぐさめられました。その後、この事を体験談で話すと、担当の市の職員から現況を教えてもらいました。

委託を受けた当初、お風呂で大絶叫して泣き続ける里子に乳児院と何が違うか考えました。家庭のお風呂に入った経験の少なかった里子の為に、乳児院のベビーバス同様に水位を下げてみたところ、恐る恐るではあるけれど泣かずに入れるようになりました。



緊急委託で受けた子とお風呂に入る時、顔にかかるシャワーを嫌がり泣くのですが、上を向いてと言う声掛けを聞いてもらえなかったので、お風呂の天井の窓に貼り剥がしが出来るウサギのシールを貼って、「ウサギさん見てね」と声かけをすることで、上を向いてもらうことに成功しました。

少食の里子。でもデザートは大好き。デザートは食事をきちんと食べてからだよと促すも、中々進みません。まずは完食体験を多くしようと、食事の盛り付け量を少なめにして完食後に「すごい!お皿がピカピカだね」と褒めて食べ切ることの喜びを体験してもらい中です。

勉強の苦手な里子。どんな小さなテストでも100点を取ってきたら褒めちぎり、壁に貼り、帰宅した夫からも褒めてもらうようにしています。

三日里親になって初めてのころ、4年生の男の子と里子のマッチングで施設に里子を迎えに行き、外食したりボウリングしたりと行き来していました。私は当時施設にボランティアに行っていて施設の子どもたちは私を知っていました。ある日里子を迎えに行った時、施設の入り口で里子と同じ部屋の同じ年の男の子に真剣な顔つきで「どうしてあの子なの？僕じゃ駄目なの？」と言われ、私はなんと云ったら良いのかわからず困った事がありました。もう10年も前の事です但忘れられない辛い経験です。一人でも多くの子どもたちに里親がついて欲しいと思います。

短期で、我が家に暮らすことになった小学生の男の子。知らない場所からの通学に不安もあるかと思い、近所の民生委員の方にお話ししておきました。その後自然な形で、ご近所の方々が登下校の際の声掛けや、見守りを心掛けてくださり子どもも知り合いが増えて、地域に慣れてゆきました。

親も呼ばれる幼稚園のお誕生日会。毎回必ず聞かれるという子どもの名前の由来。それなりに答えを用意していきましたが、聞かれたのは子どものいいところと将来どんな子になってほしいか。「えっ？先生、名前のこと聞くんじゃよ。」という生徒に、「今日はちがうこと聞いてみたいな。」さりげない心遣いに心があたたかくなりました。



私は、子どもの「お試し行動」の一つに過食と偏食があることを、全く知りませんでした。家に来たばかりの頃、あの子は毎日かかさずミカンを1キロ食べました。驚きながらも、ビタミンCは大切よと、とにかく毎日ミカン、ミカン。翌年、いつものようにミカンを買ってきましたが、1つ食べるかどうかです。やはりビックリしましたが、そういうこともあるのかと、さほど気にしませんでした。実は、過食と偏食のお試し行動はすっかり終わっていたのです。好きなだけ与えた方がいいことも、あとから知りましたが、単なるミカン好きな子と思っていた私ですが、神経質にならなかったことが正解だったのだと思うことにしました。

本当は、委託前にもう少し勉強をしておく方がいいですね。

今から10年以上前、初めての三日里親を始めたばかりの頃、泊まっていた子どもが熱を出したため施設に電話をすると、対応した職員に「三日に出すと熱を出される」と言われました。病院に連れて行き、医師に心因性か問うと、一笑に付されホッとしました。担当職員にこの事を伝えましたが、オロオロするばかりでした。

6年前に1歳9か月のR君が長期委託でやってきました。現在小学校1年生になり、重たいランドセルを背負いながら、毎日元気に登校しています。我が家に来た頃は、おとなしく能面のような顔で笑顔もなく、いつも指しゃぶりして、ベビーホームから持ってきたカエルの人形を離さず部屋の隅で過ごしていましたが、今は母親の私にああ言えばこう言う毎日、私と口喧嘩ですが、夜寝るときはいまだに背中をトントンしてと甘えてきます。最近、自分の生い立ちについて聞いてくるのがしばしばあります。5歳の時に告知はしたのですが、あまり理解していなかった様子で、先日も僕はママから生まれたの？Rという名前はママが付けたの？と聞いてきたので、本当の事を話しました。「Rを生んだのは、ママじゃないよ。ママはお腹の病気で生んであげられなかったの。Rを生んでくれたお母さんがいるんだよ。でも、わけがあってRを育てることはできなかったけど、ママたちにRを会わせてくれたから、パパとママはいっぱい感謝しているんだよ。Rはパパとママだけの大事な宝物だよ。」と言ったらそれ以上は聞いてきませんでした。これからも成長と共に色々な壁にぶつかっていくと思いますが、Rの心の成長を大事に見守っていきたいと思います。

養育中にはいろいろなことがたくさんあります。貴重な体験が誰かのヒントになるかもしれません。

そのたくさんの想いを形にたくてショートストーリーにしました。次号に続きます。



家庭養育支援センター・里親センター共催研修報告

第2回里親研修会「施設で暮らす子どもたちの理解」～いっしょに過ごす時間をよりよくするために～

講師：白十字会林間学校 臨床心理士 金杉美絵氏

報告：白十字会林間学校 里親支援専門相談員 石井千代子

7月7日（木）白十字会林間学校 交流ホールにて、3日里親、週末家庭を対象に里親研修会を開催いたしました。施設で暮らす子どもたちは、少なくとも1度は（多くの場合何人にも渡って）主たる養育者が変わっています。被虐待体験など、辛い経験をしている子が多数おり、家族とは違う他人と一緒に、やむを得ず（自分の意志ではなく）暮らしています。子どもたちを理解するためには、子どもには、その行動をする『理由』があること（ただし、本人が自覚しているとは限らない）どうしてその行動をとるのか、どうして私たち（大人の）想像を超える行動をするのか、考えることが非常に大切というお話がありました。

社会的養護の中にいる子どもは、出生後から多くの人がその子の養育に関係してきています。子どもたちの安心、安全を守り、養育の連続性、一貫性を指すために、施設、里親、関係機関はチームで支援することの大切さ、施設とは、生活の場所＝“くつろげる場所”であることを学ぶ研修会でした。

研修会後は、年齢別に3つのグループ（Aグループ：乳幼児～小学3年生、Bグループ小学4年生から6年生、Cグループ：中高生）に別れて里親サロンをおこないました。

参加された方からは「参考になる話で今後の養育に役立てる」「育てなおしの大切さ、人として育っていくための一番大事なことが見えてきた」「サロンでは同じ経験をされている方の話を聞き『これでよいのだ』と大きな気持ちで対応すればよいという方向性が見えた」「他の里親さんの話を聞き心が気楽になった」等の感想をいただきました。

第3回里親研修会「みんなで考えよう 子どもの権利って？」～里親として知っておきたいこと～

報告：児童養護施設成光学園 森速人

10月3日に『聖園子どもの家ヨハネホーム』を会場にお借りし、「みんなで考えよう『子どもの権利って？』～里親として知っておきたいこと～」というテーマで、「医療について」「子どもへの注意の仕方について」「守秘義務について」等、日常的にありそうな「事例」を、6つに分けたグループで、活発に協議しました。参加者は里親29名、児童相談所職員5名、施設職員16名、その他2名、計52名の参加でした。

里親の多くの方から“子どもの権利”という研修テーマについて、良かった。また、同じテーマで研修をして欲しい。という旨の感想をいただきました。

今回の研修を実施して改めて学ばせていただいた事は“子どもの権利”という概念は、時代の移り変わりによって変化する事。また、地域の文化や価値観の違いに伴って考えが異なる事。そのような事が「権利とは一体どういう事なのか？」という問いに対しての統一した答えを明確にする事を、難しくしている事です。従って、“子どもの権利”という事については、委託を受けている里親のみで考えるべき事でなく、里親に委託をした児童相談所や、里親を支援する施設の職員等が、一緒に考えなくてはいけない「責任」がある事を改めて認識する事ができました。

今後の研修会については、詳細が決まり次第随時里親センターひこばえのHPに掲載いたしますので、ご確認の上ぜひご参加下さい。また、研修の希望やご意見がある方は、各家庭養育支援センターまたは里親センターひこばえにお寄せください。

地 区 だ よ り

湘南・大和里親会

「なにかもが独り」 （里親研修会）

9月11日（土）、中央児童相談所の研修室をお借りして研修会を開催しました。今回の研修はアフターケア相談所「ゆずりは」の所長、高橋亜美さんを講師にお迎えして、親と一緒に生活できない代替養護が必要な子どもたちや社会的養護の下にある子どもたちの現実と児童養護施設等を退所した子どもたちに対する支援について学びました。



アフターケア相談所「ゆずりは」は児童養護施設、自立支援ホーム、里親等の養育家庭から退所する子どもたちが地域社会で安心して生活を送れるように、健全な社会人として自立していけるように支援することを目的としています。

高橋さんには、子どもの貧困の問題、虐待を受けて育った子どもたちが抱える問題、寄り添ってくれる大人の必要性などを話していただき、「ゆずりは」で提供されている具体的な生活支援（就学・就労で発生する問題への支援、専門家や公的機関との連携など）、住居支援（物件探し、賃貸契約、保証人相談など）、スキルアップ支援などの説明を受けました。

参加した里親はこの研修会で改めて、社会的養護の下にある子どもたちや社会的養護後の子どもたちが置かれている現実の厳しさを思われ、里親も寄り添うことができる大人としての存在意義を考える機会になりました。



ひらつか里親会

11月19日、1年半かけて準備を進めてきた第29回神奈川県里親大会が無事に終わり、今期の実行委員会担当会として、全力を出し切ったと、皆で称え合いました。

多くの方々のご協力を頂いたからこそこの大会の成功だと思います。本当にありがとうございました。

大会のテーマは「あなたをずっと見守っているよ。」

講師の山本先生のお話の中では、里親を始め大人たちが、子どもたちをずっと見守り続ける心を持つことの大切さ、そして見守られているという安心感を子どもたちが持つことの大きな意味が語られました。

大会を通して、私たちの会も絆が深まったように思います。里親として、里親会として、子どもたちをずっと見守り続けようねと、大会終了後の打ち上げの席で語り合いました。



鎌倉三浦地域里親会（鎌三わか芽会）

今年のクリスマス会は、大きな屋敷を借りたいつもの会場で12月25日に開かれました。出席者は大人が23人、子どもが12人で、お父さんの出席者が多いことが最近の特徴です。ひと昔前は、里父さんは行事には殆ど顔を出さなかったのですが、今では里父さんもイクメンが当たり前になってきたようですね。

おなか一杯になった頃、グループに分かれて、大人と子どもが一緒になってカルタの読み札の五七五を考え、絵も描きました。子どもたちはほんとに絵が上手!! 出来上がった作品でカルタ取りをしましたが、勝負に燃える?!中学生たちが小学生を凌駕。もう少し遠慮しなさいと、あとで親に叱られていました。クリスマスソングを独唱してくれる里父さんのそばで、おもちゃの太鼓やシンバルで伴奏?!する小さい子たちは、ほんとに楽しそうで、かわいかったです。

子どもと一緒に、優しい喧噪の中で過ごすクリスマス、嵐の前の静けさ?を夫婦で味わうクリスマス、子育てが一段落したあとの静かなクリスマス。それぞれ、悪くないですね。

県央里親会（すこやか会）

10月の始め、昨年に続きマルベリーライオンズクラブの皆様からボーリング大会にご招待していただきました。大人が楽しんだのは勿論のこと、1年成長した子どもたちは昨年以上に楽しみ、チームの得点に貢献したのではないのでしょうか。6月のバーベキューにも参加いただいた会長さんを始め、会員の方とも顔なじみとなり、昨年以上に楽しませていただきました。10月末には、唐池学園の唐池祭に恒例の里親会のブースを出店しました。事前の仕分けと値付けに多くの方が参加し、楽しくお喋りをしながらの作業（階下への荷物運びをしてくださった皆様ありがとうございました）、続けてサロンでは久しぶりにお会いできた方もいて、皆さんの近況や相談を聞きながら話もはずみ、楽しく過ごしました。たくさんの方の話を聞かせてもらうことで、自分のことも考え直す良い機会とさせていただいています。今号が発行する頃には一大イベントの宿泊研修を終えていますね。その様子もまたお伝えできたらと思います。

西湘なでしこ会

西湘なでしこ会では目玉の行事が2つあります。ひとつは9月の「一泊研修」です。城山学園の「ぐる一ふほ一む指路」をお借りしての研修会は、今年は、里親0Bより「自立した里子との今」と題して自立後の一人暮らしの課題を伺いましたが、子どもによっては生活上の細かなフォローの必要性を強く感じました。自立はまだまだ先のことと思っている里親も多いのですが、先を見通した養育の大切さを学びました。

さて、頭をフル回転させた後は、場を湯河原のホテルに移しての懇親会。おいしいお酒と食事に舌鼓を打ち、温泉に入り体も心もゆったりさせると、「明日からまた頑張ろう」そんな気持ちになります。子どもたち主導のビンゴ大会も好評でした。

もうひとつは、12月の施設と里親交流事業「みんなであそぼう」です。西湘地区には児童養護施設が4ヶ所ありますが、施設のお子さんたちと広い体育館でミニ運動会を行いました。大人と子どもがペアを組み、体を使ってゲームを楽しみ、サンタクロースも登場して大いに盛り上がりました。小さな手をつなぐと、それだけで心がほっこりします。

どちらも、児童養護施設や児童相談所の職員さんが多く参加してくださるお陰で行事が成り立っています。親睦を深める大切な場ともなっています。

これからの課題は、少ない里親会員の参加者をいかに増やすかです。委託児童の参加も、学年が進むにつれ部活等で忙しくなり減少傾向にあります。他地区ではいかがでしょうか。



RKちゃん
(小1)



NTちゃん
(小1)



NMちゃん
(小4)

編集後記 111号は養育体験集<ショートストーリー>を特別企画としました。たくさんお寄せいただいた原稿に感謝しつつ、紙面の都合上すべての原稿を掲載できず申し訳ない気持ちでいっぱいです。皆さまの言葉を活字にしていくことこそ大切な機関誌になると信じています。できる限り紙面に反映にさせていただきますので、これからも原稿募集の際はぜひご協力よろしく願いいたします。(西)